

## 「ちょっと」についての一考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学国語国文学研究室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 劉, 亜髓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-100">https://doi.org/10.24544/ocu.20171225-100</a>

<b>Title</b>	「ちょっと」についての一考察
<b>Author</b>	劉, 亜髓
<b>Citation</b>	文学史研究. 40 卷, p.32-39.
<b>Issue Date</b>	1999-12
<b>ISSN</b>	0389-9772
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学国語国文学研究室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 「ちょっと」についての一考察

劉 亜 颯

## 1. はじめに

「ちょっと」は、周知のように、少量や小程度のことを表す程度副詞である。一般に、「すこし」の類義語として扱われるが、「すこし」の用法より広いところがある。そして、少量、小程度という基本的な意味から派生してきた用法もある。本稿は、「ちょっと」の意味用法の整理と語用論の適用について、検討を進めていこうと思う。

## 2. 「ちょっと」の意味用法

### 2. 1 「ちょっと」と「ちょっとした」の基本的意味用法

「ちょっと」の基本的な意味用法と言えば、やはり数量の少ないことや程度の小さいことを表す。例えば、

- (1) 「ちょっと、アンコの量が少な過ぎちゃったんだけど」  
(曾野綾子 『太郎物語』)
- (2) 「ちょっと、シソの葉が入ると、うまいでしょう」  
(曾野綾子 『太郎物語』)
- (3) 「ちょっと待ってから油がのぼってくる。手で温めたらはやくなるよ」  
(開高健 『パニック』)
- (4) 「実はね、田舎から、お母さんがちょっと出て来たのよ」  
(曾野綾子 『太郎物語』)
- (5) 「苦味丁幾は、蒸溜しないで飲むと苦いもんだな。でも、我慢して水で割りながら飲むと、一合も飲めばちょっと酔った気分になれるんだ」  
(井伏鱒二 『黒い雨』)
- (6) 「おおむね賛成するが、僕はちょっと違うんです」(曾野綾子 『太郎物語』)
- (7) ちょっとしたかすり傷だからだいじょうぶだよ。(注1)
- (8) 敷石のちょっとした隙間にも、雑草が根をおろしている。(注2)

以上、例文(1)と(2)の中の「ちょっと」は「アンコ」「シソの葉」の量を表し、例文(3)と(4)の中の「ちょっと」は「待つ」時間や「お母さんが田舎から出てくる」時間を表す。例文(5)と(6)の中の「ちょっと」は「酔う」程度や「違う」程度を表す。いずれの例文中の「ちょっと」も量の少ないことや時間の短さ、また程度の小ささを示しているが、それを「すこし」に替えても意味上の相違はあまりない。従って、「ちょっと」の用法は、基本的に、次のように二つに分けられる。A. 量の少ないことを表す((1)(2)(3)(4))。B. 程度の小さいことを表す((5)(6))。

一方、例文(7)と(8)における「ちょっとした」という慣用形式の用法を見ると、例文(7)の中の「ちょっとした」は、傷の程度が低いことを表し、例文(8)は敷石の隙間の小さいことを表す。しかし、「ちょっとした」は量の多少を表す用例があまり見あたらない。例えば、

(9) 水をちょっと飲んだ。

と言うが、

(10) \*ちょっとした水を飲んだ。

とは言わない。また、

(11) 「その厚あげ、ちょっとくれる？」と彼女は言った。

(村上春樹 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

という文は普通だが、

(12) \*「そのちょっとした厚あげ、くれる？」と彼女は言った。

のような量の少ないことを表す文は不自然であろう。従って、「ちょっとした」は「ちょっと」と異なり、小量は表さず、小程度だけを表すと思われる。

## 2. 2 「ちょっと」の派生的用法

さて、「ちょっと」の基本的な用法を見たが、場面によって、その基本的な用法で説明できないときがある。例えば、

(13) 「ちょっと待って下さい」と私は老人の話を押しとどめた。「質問させて下さい」  
(村上春樹 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(14) 「今はね。だけど、先刻、後でちょっとお話がありますということだったの」  
(曾野綾子 『太郎物語』)

(15) 「ちょっと伺います。ここはもと樫書房という古本屋さんじゃなかったのですか？」  
(三浦哲郎 『忍ぶ川』)

(16) 「ちょっと君。そのレコード止してくれない」聴き手の方の青年はウェトレ  
スがまたかけはじめた「キャラバン」の方を向いてそう云った。

(梶井基次郎 『檸檬』)

(17) 「ちょっと！靴の中へ砂が這入っちゃって、歩けやしないよ。誰かこの砂を  
取ってくれない？……まアちゃん、あんた靴を脱がしてよ！」

(谷崎潤一郎 『痴人の愛』)

以上の例文を見ると、文中の「ちょっと」はいずれも具体的な数量や程度の大きさだけを指しているのではないと思われる。「話し手も聞き手も、その「ちょっと」における時間や量の多少にはそれほど関心を持っていない。話し手が相手に働きかける時の何らかの感情・気分（気軽さ、相手への配慮、直截さを避けるなど）が付け加えられているのである」と彭飛氏（1994）は述べている。つまり、「ちょっと」は、この場合に、具体的な数量や程度に重点を置いているのではなく、話し手の気軽さやためらいなどを表す。「ちょっと」のこの用法は語用論の気配りの原則の中の負担・利益の尺度で、明確に解釈することができる。ジェフリ・N・リーチ氏は、「負担・利益の尺度では、提示された行為Aが話し手または聞き手にとってどれ程の負担または利益をもたらすものであるかが評価される」（1987）と論述している。厳密に言えば、負担・利益の尺度は二つの個別の尺度からなっている。すなわち、話し手にとっての負担/利益と聞き手にとっての負担/利益である。一般的に、話し手にとっての負担が大きくなれば、聞き手にとっての利益は大きくなる。そうすると、丁寧さを果たすことができる。逆に、話し手にとっての負担が小さくなれば、聞き手にとっての利益は小さくなる。

例文(13)～(17)を見ると、いずれも他人に負担をかける可能性がある発話である。例えば、例文(13)では、他人の話の途中で押しとどめるのは、勿論失礼なことである。それに、「待って下さい」とだけ言うと、「待つ」時間の長さは特に制限がない。聞き手にとっては、負担をかけられることと言える。ところが、「ちょっと」を用いると、聞き手にその負担を小さく感じさせることができる。従って、「ちょっと待って下さい」は「待って下さい」より丁寧であると考えられる。そして、例文(13)と同じように、例文(14)「お話があります」と例文(15)「伺います」も、話し手が聞き手に負担をかける発話である。そこで、話し手は「ちょっと」を用いて、その発話から聞き手にもたらす負担感を小さく感じさせ、発話の丁寧の度合を高くすることができる。例文(16)と(17)の中の「ちょっと」は独立語である。この場合における意味用法については、『現代国語例解辞典』によれば、これは「軽く相手に呼び掛けるときの言葉」とであると書かれている。この表現は、話し手が聞き手を自分に注意を向かわせるために用いるもので、聞き手にとっては、やはり負担を感じることである。しかし、「君」とだけ言うより、「ちょっと君」と言うほうが聞き手の負担感が小さい。それ故、呼び掛けの言葉として、「君」に比べて、「ちょっと君」のほうがより丁寧であると思われる。但し、「君」と呼び掛けること自体がぞんざいなので、あくまで相対的な問題である。要するに、例文中の「ちょっと」は、違う文脈にあるが、機能としてはすべて聞き手の気持を配慮して、負担を小さく感じさせる表現であると考えられる。これは「ちょっと」の基本的な用法から派生してきた一つの用法であると思われる。

次に、「ちょっと」のもう一つの派生的な表現を見てみる。

(18) あのを、ちょっとよくわからないんですけど、ここはどういう意味なんですか。

(19) 「当時軍規はまだ厳正で、浜砂少尉が中隊長の命令無しに当日勝手に墜落機をさがしに出かけたとは、ちょっと考えられない」

(阿川弘之 「山本五十六」)

(20) 「駅はどっちですか」「さあ、ちょっと……」(注3)

これらの例文中の「ちょっと」は打消しとともに用いられるが、『現代副詞用法辞典』(1994)では、この場合の「ちょっと～ない」は「可能性がない様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられるが述語部分を省略する場合もある。ほんの少しの可能性もないという意味であるが、「まったく」「ぜんぜん」などを用いる全否定ではなく、相手への配慮を残した表現になっている」と記されている。このような可能性がない様子を表す文における「ちょっと」の機能を、まず、語用論の是認の原則によって分析してみよう。

ジュフリー・N・リーチ氏の説によると、「他者の非難を最小限にせよ：他者の賞賛を最大限にせよ」(1987)という是認の原則がある。例えば、

(21) What a marvellous meal you cooked!

(あなたは何とすばらしい食事をお作りになったことでしょう。)

のようなお世辞は、是認の原則によれば高く評価されるのに対し、

(22) What an awful meal you cooked!

(あなたは何とひどい食事をお作りになったことでしょう。)

という文はそうではない。(注4)

是認の原則によれば、賞賛しないということは非難することを含意している。例えば、例文(18)の場合には、ある人の発表を聞いてから、わからない所があって、それに関して質問するときに、「よくわからない」という発話は聞き手に対する非難と言える。その非難の程度を小さくするために、話者は「ちょっと」を用いている。また、例文(19)「ちょっと考えられない」というのは、話者が他人の意見に賛成しないとき、言い替えれば、非難するときに用いる表現である。ここに「ちょっと」を加えて、他人の判断への非難を和らげて表す。例文(20)「駅はどちらですか」に対する答え「さあ、ちょっと……」の発話は、実は「わかりません」の意を表している。また、

(23)「今晚、一緒に飲みに行きませんか」

「今日はちょっと……」

という文は、他人の誘いを拒否するときの言い方である。「今日はちょっと」が表すのは「今日はだめ」という意である。しかし、(20)と(23)のような非難の意を含んでいる拒否の文には、「ちょっと」を加えれば、非難の程度が小さくなる。それに、「……」という省略の形を用いると、拒否の直截さをさらに避けることができる。さらに、もう一つの例文を見てみる。

(24)あの人はちょっとね。

この文は、決して「あの人は素敵だね」ということではなくて、「あの人は変だね」というニュアンスの意味を表す文である。その理由に関して、是認の原則をもう一度見なければならぬ。もしこの文の意味が「あの人はちょっと素敵だね」という誉め言葉であれば、話し手ははっきりと言わなければならない。なぜならば、是認の原則によると、他者に対する賞賛は最大限にするべきだからである。従って、例文(24)は、「あの人は変だね」というようなマイナスの評価を表す文しか考えられない。そのマイナスの意味を控えめに表すために、話し手は「ちょっと」を使用するのである。

しかし、否定の文脈における「ちょっと」が、全部是認の原則によって解釈できるわけではない。例えば、

(25)ちょっと助かりそうもありません。

という例文は、他者への非難の意を含んでいない。この文は話者が望ましくないことを和らげる言い方と考えられる。例えば、地震のとき、人が倒れた建物に埋められて助けられないという不幸なことを言及する際に、

(26)到底助かりません。

のような言い方より、「ちょっと」を用いるほうが丁寧であると思われる。また、レストランで、仕事が見つからなくて、生活は苦しくなる人の話しを聞いてから、

(27)ええ、このままじゃ、生活はぜんぜんやっていけませんよね。

の代わりに、

(28)ええ、このままじゃ、生活はちょっとやっていけませんよね。

と言い、大雨で友人の家が壊れたということを知った後、

(29)こんなことになるなんて、ちょっと想像もしなかった。

と嘆くような発話では、話し手は「ちょっと」を用いて、その望ましくないことを控えめに話すことによって、聞き手に同情を示しているのである。

例文(25)～(29)の中の「ちょっと～ない」の文で言っていることは、すべて話し手にとっても、聞き手にとっても、望ましくない不幸なことである。このようなことに対して、話し手はできるだけ控えめに言って、同情を示すという原則があると考えられる。そこで、「他人の不幸なことを言及するときには、同情の気持を示せ」という原則を、本稿で仮に、「同情の原則」と呼ぶことにする。(注5)

## 2. 3 程度がそれほど低くないことを表す「ちょっとした」と「ちょっと」

「ちょっとした」は2. 1で述べたように程度が小さいことを表すが、それ以外に、次のような使い方もある。例えば、

(30) しかし弥平次には、別なことで疑問があった。この荷物である。つまり、義秋の家財道具であった。最初、無一文だった義秋も、諸国の大名が送りつけてきた贈りものが貯まって、ちょっとした物持になっているのである。

(司馬遼太郎 『国盗り物語』)

(31) 新しく始めた事業が成功し、M氏はこの一年ちょっとした財産を築いた。

(注6)

(32) ふじ子の奴が、このごろ急に大人びて、ちょっとした美人になった。

(三浦綾子 『塩狩峠』)

(33) 彼はちょっとした有名人になった。

(34) 山本太郎は、「大マンション」に於ける「山本邸」の生活を優雅に楽しもうと思っていた。アパートは五階までしか無いのだが、その辺りは草一本無い荒涼とした新開地の中でも、多少高い所なので、「堂々たる白亜の大殿堂」ではないにしても、薄茶色のちょっとした高層建築に見えないではなかった。

(曾野綾子 『太郎物語』)

(35) どうだい、おれもちょっとしたもんだらう。(注7)

(36) 日本郵船が日本最大最高級と誇る船だけあってお値段もちょっとしたものだ。

(朝日新聞)

以上の例文中の「ちょっとした」は、決して程度の低いことを表しているわけではない。『現代副詞用法辞典』によると、ここの「ちょっとした」は、「かなり」という意味である。しかしながら、「ちょっとした」を「かなり」に言い替えることはやや無理であろう。「かなり」が表す程度は、実際、「ちょっとした」より高い。また、森田良行氏は『基礎日本語辞典』では、「ちょっとした」は「さほど低いレベルではない、ある程度」の意味を表すというふうに述べている。この解釈は比較的妥当であろうと思う。

「ちょっとした」のこのような用法は、「ちょっと」が程度を表す場合にもある。例えば、

(37) たとい如何なる美人があっても、一度や二度の見合いでもって、お互の意気や性質が分る筈はない。「まあ、あれならば」とか、「ちょっときれいだ」とか云うくらいな、ほんの一時の心持で一生の伴侶を定めるなんて、そんな馬鹿なことが出来るものじゃない。

(谷崎潤一郎 『痴人の愛』)

(38) 「ちょっとむずかしい問題だな。人間にはどの人の心がいいか悪いが、ほんとうの話は見当がつかないんだよ。とにかく、天はどの人間も、上下なく造ったことはまちがいないね」

(三浦綾子 『塩狩峠』)

(39)「ちょっといい男前ね。いくつぐらいかしら」 (松本清張「点と線」)

(40)君と横浜で別れた翌日、まだ大分すさまじいカサブタの堆積がある時、僕は思いついて、一日渋谷を歩いてみた。初め、僕の何でもない方の横顔を見た人は、僕がわざとカサブタだらけの半面を見せると、ギョッとしたような顔つきをしましたが、僕の病気の方を見てから健康な半面を見た人の中には、いかにもかわいそうに、という表情をして見せたのもいました。僕の癩病に似てる、としきりに言っていたのですが、いまだきこんな癩病が放置されていないことぐらい、ちょっと知識のある人は知ってるんだね。

(曾野綾子「太郎物語」)

(41) ちょっとばかりの名の通った男だ。

以上の例文中の「きれい」「むずかしい問題」「いい男前」「知識ある人」「名の通った男」の前に、「とても」や「相当」などの副詞を加えれば、程度が高いことを表すことになるが、「ちょっと」を用いれば、程度がそれほど低くないが、非常に高くもないという意味になる。

ここでの問題は、どんな場合に、もともと小さい程度を表す副詞「ちょっと」または「ちょっとした」が程度の高いことを表し得るのかということである。例文(30)～(41)を見れば、一つの共通点がある。それは、「ちょっとした」の後の被修飾名詞と「ちょっと」の後の形容詞、形容動詞などは、いずれももともとそれ自身が高い程度のものである。例えば、「物持」「財産」「美人」「有名人」「高層建築」「きれい」など。例文(35)と(36)の中の「もの」自身は、もともと程度が高いものではないが、「ちょっとした」と共に用いられるときに、文脈から見ると、すべて程度の高いものの意味になっている。例文(35)「おれもちょっとしたもんだらう」は、話者が自分のことを自慢して聞き手に言う言葉であるから、自分を指す「もの」というのは決して普通のレベルでないものであることがわかる。また、例文(36)では、文の前半「日本郵船が日本最大最高級と誇る」という文脈があるため、その値段は高いと推測できる。従って、郵船の値段を指す「もの」は、程度が高いと判断できる。

以上の分析を見ると、次のようなことを言えるのではなかろうか。被修飾語が高いレベルのものであれば、その前に「ちょっと」と「ちょっとした」のような小程度の副詞を加えても、レベルはそれほど低くならない、つまり、まだ比較的の高いレベルのことを表す。ただ、その程度の高さは普通より高いが、「とても」「非常に」「相当」「かなり」ほどのレベルまでには至っていないと思われる。「ちょっと」と「ちょっとした」のこのような表現は、事柄のレベルが高いものであるけれども、「非常に」「相当」と言えない場合の控えめな言い方と考えられる。

### 3. おわりに

以上、程度副詞「ちょっと」の基本的な用法、またその派生的な用法は、次のようにまとめられる。

- (1)「ちょっと」は、基本的に、数量の少ないことや程度の小さいことを表す副詞である。
- (2) 語用論の気配りの原則によれば、相手に負担や迷惑をかける可能性があること(呼び掛けも含めて)を発話するときに、話者は「ちょっと」を用いて、相手の気持を

配慮して、その負担感を減少することができる。

- (3) 否定の文脈では、語用論の是認の原則によって、話し手は他者の非難を小さくするために、「ちょっと」を用いて、非難を控えめに表す。また、望ましくない不幸なことを言うときに、話者は「ちょっと」を用いて、そのことのマイナスの程度を控えめに表す。それによって、聞き手に対する同情を示す。これは、「同情の原則」と呼ぶことにする。
- (4) 「ちょっとした」は、程度が小さいことを表すが、程度がそれほど低くないことも表せる。例えば、「財産」や「有名人」などの被修飾語が高いレベルのことである場合には、その前に「ちょっとした」を加えても、程度がそれほど低くない、普通より高いということを表す。しかし、その程度は「非常に」や「相当」のようなレベルまで至っていない。「ちょっとした」のこのような使い方は、「ちょっと」が程度を表す場合にもある。

(注1) 飛田良文・浅田秀子(1994) p. 291の例文を引用。

(注2) 林史典・金子博・他(1986) p. 494の例文を引用。

(注3) 飛田良文・浅田秀子(1994) p. 292の例文を引用。

(注4) ジュフリー・N・リーチ(1987) p. 54の例文を引用(池上嘉彦・河上警作訳)。

(注5) ジュフリー・N・リーチ氏(1987)には、この問題に関連する原則として、「共感の原則」(断定型において)がある。この原則は、「(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ。(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ」というものである。(但し、「最大限」という言い方はあまり適切ではないと思われる。)この原則によると、例えば、聞き手の猫が亡くなったと聞いて、

① I'm terribly sorry to hear that your cat died.

(あなたの猫が亡くなったと聞いて、本当にお気の毒に存じます。)

というのは、\*I'm terribly pleased to hear that your cat died. (あなたの猫が亡くなったと聞いて、本当にうれしく存じます)と対照すれば、丁寧である。にもかかわらず、お悔みの表現には何らかの遠慮が伴う。それ故、①の代わりに、

② I'm terribly sorry to hear about your cat.

のような言い方が好ましいであろう。また、共感の原則によれば、例えば、キャット・ショウに入賞した人に、祝賀の言葉として、

③ I'm delighted to hear about your cat.

(あなたの猫のことをお聞きし、うれしく存じます。)

という表現もある。

リーチのこの「共感の原則」は、話し手の聞き手のことに対する評価であるが、第三者のことに對して、適用し得るかどうかが氏は述べていない。また、この原則は同じ断定型の構文で望ましいことにも(③)望ましくないこと(②)にも適用できる。以上のことは、「ちょっと～ない」という否定型の構文とは違ふ。「ちょっと～ない」のような文は望ましいことに対して言うことがあまりないであろうと思われる。また、「ちょっと～ない」という文は第三者の不幸なことを言うときにも適用できる。従って、「共感の原則」に当てはめられ

ないところがあるため、「同情の原則」という原則を仮定してみた。「同情の原則」が適用できるのは、「ちょっと～ない」以外の表現もある。例えば、幼児がお母さんに虐待されて死亡したことやある友人はお母さんを看病して、自分が倒れたということを知った後、

④ ああ、その子はかわいそうですね。

⑤ 大変ですよ。

というような同情を示す言葉を用いる場合である。例文④の発話では、話し手が第三者の立場で言っており、例文⑤の場合には、聞き手は話し手の友人である可能性もあるし、友人ではない可能性もある。つまり、話し手がある望ましくないことに関して、同情を示すときに、聞き手はその当事者でもいいし、当事者ではなくてもいい。「同情の原則」では、聞き手がだれかということは重要でないと思われる。

(注6) 林史典・金子博・他(1986) p. 494の例文を引用。

(注7) 飛田良文・浅田秀子(1994) p. 292の例文を引用。

#### 【参考文献】

- 工藤 浩 1983年 「程度副詞をめぐる」(『副用語の研究』渡辺実編) 明治書院  
沖 久雄 1983年 「小さな程度を表す副詞のマトリックス」(『副用語の研究』渡辺実編) 明治書院  
ジュフリー・N・リーチ 1987年 「語用論」池上嘉彦・河上警作訳 紀伊国屋書店  
ジュフリー・N・リーチ 1986年 「意味論と語用論の現在」内田種臣・木下裕昭訳 理想社  
服部 匡 1996年 「程度副詞と比較基準—「多少」、「少し」を中心に—」同志社大学学術研究年報 Vol. XXXVII IV  
渡辺 実 1988年 「程度副詞の体系」上智大学 国文学論集 23  
ジェニ・トマス 1998年 「語用論入門」浅羽亮一監修 研究社出版  
森田良行 1989年 「基礎日本語辞典」角川書店  
飛田良文・浅田秀子 1994年 「現代副詞用法辞典」東京堂出版  
小学館辞典編集部 1985年 「現代国語例解辞典」小学館  
山田俊雄・築島裕・白藤禮幸・奥田勲編修 1985年 「新潮 現代国語辞典」新潮社  
彭飛 1994年 「「ちょっとは」ちょっと…」講談社  
ポール・グライス 1998年 「論理と発話」清塚邦彦訳 勁草書房  
林史典・金子博・鶴岡昭夫・教育技術研究所編 1986年 「国語基本用例辞典」教育社  
— 本学大学院後期博士課程 —